10月18日（金）～10月27日（日）

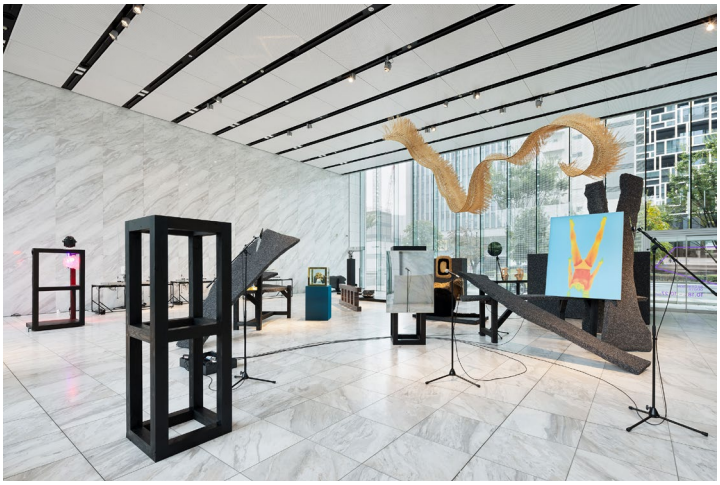
DESIGNART TOKYO 2024 REPORT

（デザイナートトーキョー）

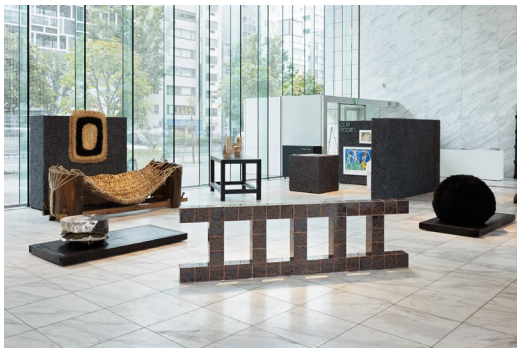
「Reframing ～転換のはじまり～」のテーマのもと
過去最大規模となる117の多彩なプレゼンテーションが集結した10日間

世界屈指のミックスカルチャー都市、東京を舞台に、デザイン、アート、インテリア、ファッションなどが多彩なプレゼンテーションを開催する日本最大級のデザイン＆アートフェスティバル「DESIGNART TOKYO」。今年のテーマ「Reframing ～転換のはじまり～」のもと、従来の枠組みにとらわれず、別の視点から見つめ直し、新たな価値を提示するクリエイター・作品が世界中から集結した「東京の街が美術館となった10日間」のハイライトをレポートします。

オフィシャルエキシビション「Reframing」展
4つの視点がクロスオーバーするReframing体験



View of Reframing Exhibition ©Nacasa & Partners



＜空間デザイン＞ HYBE Design Team
＜協力＞株式会社ワールド／乃村工藝社／スタイレム瀧定大阪／セットアップ／ティンバークルー／MDES／リセット／K3／ミマキエンジニアリング／リンテ ックサインシステム

キュレーター：「ART」金澤 韻（こだま）・現代美術キュレーター ／株式会社コダマシーン アーティスティック・ディレクター、「DESIGN」川合将人・インテリアスタイリスト／スペースデザイナー　BUNDLESTUDIO Inc.代表、「CRAFT」立川裕大・伝統技術ディレクター、「TECHNOLOGY」青木竜太・芸術監督 / 社会彫刻家

参加クリエイター：ARKO／Ben Storms ／Human Awesome Error／HIROMINE NAKAMURA（中村弘峰）／Jiabao Li／India Mahdavi ／José Zanine／ Caldas／ Kei Hasegawa（長谷川 絢）／Kenji Hirasawa（平澤賢治）／Kenji Hirasawa and Yoshiki Masuda／Marion Baruch／Namae Myoji（みょうじなまえ）／nendo／nor／Noritaka Tatehana（舘鼻則孝）／ryo kishi ／STUDIOPEPE／The TEA-ROOM (Ryuta Aoki + Soryo Matsumura)

従来の枠組みにとらわれず別の視点から見つめ直すことで、新たな価値を提示するクリエイターたちの営みに注目した今年度のオフィシャルエキシビション。アート、デザイン、クラフト、テクノロジーといった、異なる分野の第一線で活躍する4人がキュレーションした18組のクリエイターによる“Reframing”を体感できる展覧会となりました。鑑賞者の視点に制限をかけないよう、あえて分野を分けず展示をした本展示では、来場者が実際の観賞体験を通して、思考をめぐらせながら興味深く1点1点をめぐる姿が印象的でした。

HYBE Design Team（代表：竹田純）による会場デザインは、再生素材「TUTTI」を無垢の素材全面にあしらったボードを使い、作品をより魅力的に見せながらも展示台自体も作品の一部のように活き活きとした表情を見せました。壁で区切らず回遊して作品鑑賞ができるようになっているだけでなく、会場全体に躍動感を与え、高級な素材を使用しなくても存在感やテクスチャーを用いた空間デザインは、新しい視点による「スタンダード」を提示しました。

またReframing展が行われたメイン会場前には、DESIGNART TOKYOのロゴがあしらわれた今年度のオフィシャルカー「Volvo EX30」が展示され、エントランスを華やかに演出しました。

Volvo EX30　©Nacasa & Partners

「Reframing」展　主催：DESIGNART TOKYO実行委員会（株式会社デザイナート）助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】

ARTS COUNCIL TOKYO

会場：ワールド北青山ビル（東京都港区北青山3-5-10）

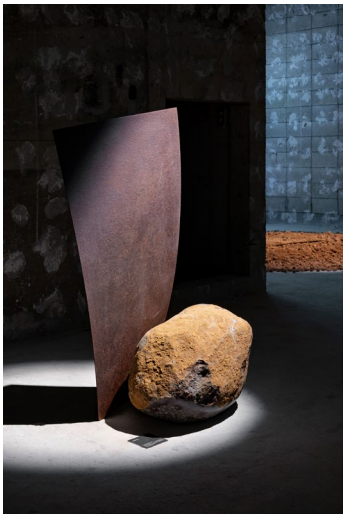
自然素材の持つ力に魅了された展覧会

JOINT EXHIBITION：Woodwork at AXIS Gallery

参加クリエイター：CONSENTABLE / Takusei Kajitani 、iwakagu、MARUHON INC.、ODS / Oniki Design Studio、SHINYA YAMAMOTO、TGDA+639 、tossanaigh

六本木の「AXIS GALLERY」では、近年改めて注目が高まる、家具やインテリアの素材として欠かせない『木』をベースにした作品が一堂に集結しました。建築家・デザイナー鬼木 孝一郎によるODS / Oniki Design Studioは、日本の組子技術を発展させ、立体的に組み付けた 「Forêt（フォレ）」の新作シリーズを、梶谷拓生のCONSENTABLE（コンセンタブル）は“Deep dive into what I want.”というテーマで、10年間におよぶ活動を紹介しました。静岡のオーダーメイド家具工房 iwakaguは、「木」に焦点を当て、住まいと木工の関係を見つめ直した木製家具を発表。MARUHONはナラ枯れ材を活用した無垢フローリングと、木・鉄・石の素材の魅力を活かしたカスタムメイドが可能な家具を、SHINYA　YAMAMOTOは「やぼったいけど、愛おしい。」をテーマに、素朴だけどキャッチーなフォルムと素材・質感から醸し出す雰囲気をプロダクトとオブジェの中間的な表現で落とし込んだ家具作品を展示しました。その他、TGDA+639（髙須学（TGDA)＋百瀬聡文（挽物所639））は、「分解と再構築」をコンセプトに制作工程のどこかに意図的なわずかなズレや傾き、回転・反転などの変化・分解を加え再構築し、計算されたジオメトリーな美しさを追求したプロダクトを、デザインユニットtossanaigh(トッサネ)は、使い道が決まらないまま眠っている林地残材を活用した、大胆なデザインのサスティナブルなダイニングテーブルを展示。それぞれの個性が集結した今年度注目の展示となりました。

上_Forêt 新作シリーズ（ODS / Oniki Design Studio）下_「やぼったいけど、愛おしい。」（SHINYA YAMAMOTO）ともに©RYO USAMI



©Nacasa & Partners

frottage -記憶との再会-

宮城県南部の阿武隈山系北端に位置する大蔵山に本社を構える大蔵山スタジオは、デザインスタジオ TAKT PROJECT とともに「frottage -記憶との再会-」を展示しました。大蔵山で採石される、世界的に珍しい表情を持つ伊達冠石。鉄分が多い伊達冠石が風化して生成した「大蔵寂土」という赤土は、石が土へと変容し、山のいのちの循環が凝縮された大蔵山の「いのちの記憶」そのものです。
本展示では、地表に無垢の鉄板を直接置き、時間を置くことで寂土から山の記憶を纏った鉄板のフロッタージュを、寂土の起源である伊達冠石と「再会」させたアートオブジェを展示。マテリアル同士が響きあい、大蔵山における記憶と記憶の再会が表現された展覧会となりました。

Straft　Exhibition“NEST”（UNDER 30）

Tamaki IshiiとKazuma Yamagamiによるクラフトユニット Straftは「Exhibition“NEST”」と題し、昔から屋根や壁、生活に必要な道具としてだけでなく神事にも用いられるなど、祈りの対象物として敬ってきた稲藁を使った作品を展示しました。自然とともに共生していこうとする自然観の中に、現代に必要とされる精神的な豊かさの本質を探った本展示では、衣服から家具まで印象的で力強い作品が並びました。

Courtesy of Straft

新たな視点でプロダクトデザインの可能性を拡げた作品群

Saki Takeshita (UNDER 30)

デザイナーの竹下早紀は、世界一軽い木材として知られるバルサ材を染色し、200 度近い熱風を当てて色を変化させ、グラフィカルに展開した作品「Eeyo（イーヨー）」を発表しました。本展示では、個性的なデザインの12脚の椅子を展示し、その印象的なプレゼンテーションと色展開で、多くの来場者を魅了しました。木材と染料の相性によって起こる不思議な現象により、緑色がピンク色に、青色が赤色にと、染める時間、熱の当て方によって色や模様を変化させることができ、木材を用いたプロダクトデザインの新しい表現方法を提案しました。

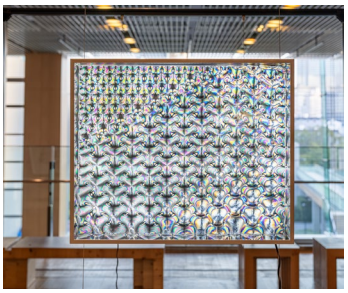
Saki Takeshita, 130, AAAQともに
©KOHEI YAMAMOTO

130

3Dプリントを超えた、棒状の素材による革新的な立体造形技術をコアにしたブランド「130(ワンサーティ)」は、特有の格子状の構造を飾ることなく縦横のラインだけで構成し、まるで空中から抽出されたかのようなプリミティブな形態のテーブルと椅子、照明の展示を行いました。同ブランドにとって初の家具コレクションとなる本作品は、会場となったISSEY MIYAKE GINZA / 442の空間に溶け込みながらも独特の世界観を持ち、家具製品としての可能性を感じさせる注目の展示となりました。

AAAQ (UNDER 30)

プロダクトデザイナー/プロデューサーの都淳朗・UIデザイナーの太田壮によるクリエイティブ・ユニットAAAQ（エーキュー）は“光弾性（photoelasticity）”と呼ばれる目には見えない秘めた力を鮮やかに可視化する現象を利用し、負荷によって生まれる光のテクスチャを鑑賞する作品「Visible Stress」を発表しました。身の回りにある素材や潜む美しい力を、新たな視点で見つめ直すことで生まれた作品です。



HOJO AKIRA (UNDER 30)

HOJO AKIRAは、製造管理や在庫管理の観点からさまざまなマテリアルが使われ、分解性を考慮することが難しい製品「ソファ」に対する違和感を出発点に、分解性を考慮した構造と再生利用を目的とした素材で設計を行ったプロトタイプのソファを展示しました。単一のマテリアルが接合し、ファブリックでクッション材をくるむこともせず、それぞれの素材のまま再利用が可能な設計は、見る人へ強烈なインパクトを与えるとともに、全てが満たされることが当たり前の世の中に、新たな視点と価値観を考えるきっかけを与える作品となりました。

FARM AND BUILD

FARM AND BUILDメンバーである佐藤建は、泥土を混入して漉くという技法により、シミができにくく日の光が当たっても変色しない、江戸時代から続く兵庫県西宮市北部の「名塩和紙」を使った家具シリーズ「NAJIO SERIES」を発表しました。「名塩和紙」をでんぷん糊で貼りフレンチポリッシュと呼ばれる技法で薄くシェラックニスを塗り重ねていくことで、紙に含まれる繊維や泥土の濃淡が質感として見える作品PILLAR STOOL(白)に加え、再生和紙を漉き直す過程で泥を加え、柿渋と鉄媒染液で黒染めし、手でちぎりながら家具に貼り込んだ作品 PEDESTL TABLE (黒／左)も発表されました。

PULSE

PULSEのメンバーの一人である三井 大輝は、伝統工芸である「一閑張」の技法を取り入れ、現代の無機質な素材に手仕事ならではの質感を纏わせた新たな一閑張「素雅一閑張」を発表しました。一閑張りとは、 竹かごや竹編みに和紙を重ね、柿渋や漆を施すことで強度を高め、 長く愛用できる形に仕上げる技術です。今回は5種類の素材で花器を制作しました。

FARM AND BUILD , PULSEともに©Usami Ryo

美しいデザイン・アートのプレゼンテーション

&T × 大竹寛子
Flow and Movement

工業用刺繍機メーカーTAJIMAが今年ローンチした刺繍アートブランド“&T（アンドティー）”は、現代日本画家 大竹寛子氏との空間インスタレーションとコラボレーション作品「Flow and Movement」を展示しました。

スパイラルの大きな階段の空間いっぱいに、手で触れることによって刺繍が連鎖的に発光する作品や、刺繍で作られた立体の蝶たちが作品の前で羽ばたくインスタレーションアートを演出しました。会期中は、子どもから大人まで楽しんでいる姿が多く見られました。

©Nacasa & Partners

©Nacasa & Partners

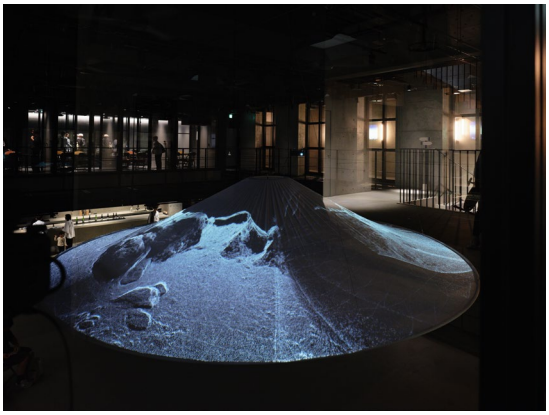
Paola Lenti「Hana-arashi 花嵐」by nendo

Paola Lenti Tokyoでは、2022年に発表した「Mottainai」プロジェクトの第2章として、自社開発「Maris」ファブリックを使った最新コレクション「花嵐 Hana-arashi」が展示されました。本作品は、デザインスタジオnendoが、日本の「もったいない」という美徳ある生産哲学により、廃棄処分されるはずの生産残材に機能と美的価値を回復させ、新たな命を吹き込んだ「花嵐」シリーズのファニチャーです。「花嵐」とは桜の花びらが風に舞う「第二の美」を意味し、店舗では残材を使った、まさに作品を象徴する「花嵐」が表現され、来場者を魅了していました。

KEF　音と光に浸る空間の祭典

1961年に英国で誕生したオーディオブランド「KEF」は、著名なデザイナーであるマイケル・ヤングと、青山の「KEFミュージックギャラリー」を設計した、クライン・ダイサム・アーキテクツ(KDa)とのコラボレーションによる展示を行いました。会場には、ヤングが1990年代にデザインした革新的な作品「スティックライト」の鮮やかなマルチカラーのディスプレイと、彼がデザインしたKEFのスピーカー「LS60 Wireless」も展示され、スピーカーをかたどった印象的なKEFミュージックギャラリーの空間で、３者のクリエーションが融合した作品展示となりました。

©Nacasa & Partners



©KOHEI YAMAMOTO

富士フイルムデザインセンター
富士をあじわう旅

富士フイルムのフィルム工場敷地内から湧き出る、良質な湧水を仕込み水にしたオリジナル日本酒「富士王」。その魅力をより気軽に楽しんでもらおうと、今年新たに1合缶をリリースしたことに合わせ、普段はデザインスタジオである南青山「CLAY STUDIO」の地下に出現した富士山を目指す旅を、日本酒「富士王」と共にあじわうインスタレーションを開催しました。
富士フイルムのインハウスデザイナー80名全員の手によりオリジナルでデザインされた「CLAY STUDIO」の大きな地下空間でのプロジェクションによる富士が美しくもあり印象的なイベントに、多くの方が訪れました。

進化するアップサイクル
廃棄される素材を新たな視点で再利用

Courtesy of HONOKA

Aqua Clara × HONOKA
Trace of Water - 水の痕跡 -

国内屈指のウォーターサーバーシェアを誇る「アクアクララ」は、デザインラボ「HONOKA」との共創で、ボトルの素材としての可能性を探るボトルアップサイクルの展示を行いました。役目を終えて多くの水分を吸湿したリターナブルボトルは、熱を与えて加工することで色彩や質感に水の痕跡を想起させる微細な変化が生じます。さまざまな加工法や素材に触れてきた経験を持つHONOKAは、この吸湿する特性と強度を持つポリカーボネート製ボトルの素材の潜在力を引き出し、審美性と機能性を兼ね備えた「建材」とそれらを応用したプロダクト展示で、アップサイクルの未来の可能性を示しました。

HIROTO IKEBE（UNDER 30）
COCOON ANATOMY / 繭を解く

池部ヒロトは、現在衰退の一途を辿りつつある養蚕文化に新たな視点や価値をもたらすことを目的として、その存在を読み解き再解釈し、土地に根ざした伝統的な技術と最新のテクノロジーを組み合わせることで、繭から出る廃棄物を素材とした新たなプロセスを持つ衣服「COCOON ANATOMY」を発表しました。
この美しいプレゼンテーション展示を通して、工業化によって不可視化しつつある「素材や生産者との関係性」を視覚化し、テキスタイルの製造プロセスの理解を取り戻すことで、養蚕文化の記憶の再生と継続の大切さを伝えました。

©Nacasa & Partners

TOYOTA 構造デザインスタジオ
クルマの記憶：ガラスによる素材の変容と情景

TOYOTA 構造デザインスタジオは、ベースとなるデザイン思想「Geological Design」の下、開発初期段階から資源を最小化する取り組みやリサイクル活動はもちろん、それでも捨てられてしまう資源については、前の命よりも魅力的になるようなアップサイクルの活動も行っています。本展示はファクトを知ってもらい、それを等身大で身近に感じてもらうことを目的に開催され、リサイクル率の低い自動車ガラスや、自動車に用いられる金属、最終残渣物である「スラグ」などを使用。ガラスを媒体としクルマの素材を多面的に変容させることで、クルマの記憶やその情景が表現されており、新しい視点を与えてくれる作品展示となりました。

©Nacasa & Partners

Courtesy of PULSE

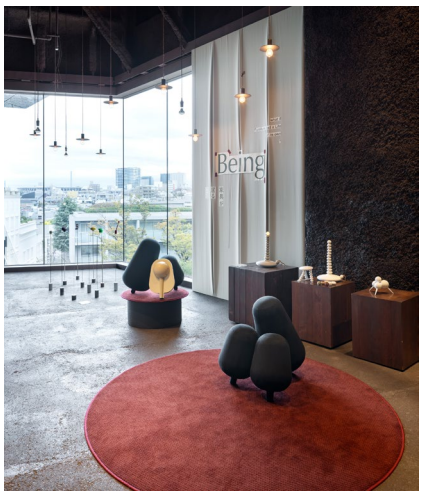
PULSE

PULSEのメンバー豊嶌 力也、多木 翔夢は、工業製品の生産プロセスのひとつで使われる「砂型鋳造」の、中でも金属部品に空洞を作るために使用される「中子型」に着目したプロダクトを製作しました。中子型は成形の際に炭化し金属片が混入してしまうため、使用後に廃棄されてしまいます。この砂を異なる視点で捉え、新たな価値を与えて人々の生活にアクセントを加えるプロダクトSAND PRODUCT「OUTLINE」を発表しました。

新作から新しい視点まで、ライフスタイルを豊かにするインテリア

LIXIL ¦ bathtope
thinking of the earth & people, bathrooms evolve

水まわり・タイルの国内事業100周年を迎えたLIXILは、「お風呂はもっと、自由でいい。」をコンセプトに、布製のたためる浴槽（fabric bath）を備えた浴室空間「bathtope」を発表しました。「日本の多くの人々に愛されてきた日常的な入浴習慣が、この先もそのままでいいのか？」という問いを背景に、多様な個性やライフスタイルに寄り添い、柔軟に変化する浴室空間の在り方を追求し、地球環境への負荷軽減と愉しみが両立できる入浴方法や入浴回数を模索。その答えとしてたどり着いたのが、シャワールームでもバスルームでもない、一つの空間を自在に切り替えられる浴室空間「bathtope」でした。時間、季節、気分に合わせた自由な選択肢をもたらし、多様性を受け入れ、浴室空間の新たなあり方を提案する展示となりました。



乃村工藝社　Being 家具が居ること

空間の総合プロデュース企業・乃村工藝社は、人と物との関係性について再考するプロジェクト「Being 家具が居ること」を発表しました。空間をデザインする中で、創りだした物が十分に使える状態で廃棄されることなどに課題を感じていた同社は、物への愛着が芽生えることが、永く大切に使うことにつながるひとつの方法と考えました。「家具が“ある”から“居る”という存在に変わったら」という人と物の間の価値変容を、最適な座り心地を探る椅子や、バランスを取りながら物を置くテーブル、休みたい照明など、新しい視点による一連の実験的デザインを通して問いかけました。サステナブルなデザインアプローチによる本展示は、国外来場者からも海外展開の要望など反響がありました。

Muuto
New Perspectives on Scandinavian Design

ニューノルディックデザインを牽引するデンマークの家具ブランド「ムート」は、2つのラウンジチェアの新作を発表しました。スカンジナビアデザインの伝統とモダンなラインを融合させたアンデシェン＆ヴォルによる「ドーズラウンジチェア」と、シンプルでありながら強いアイデンティティを持つイスコス・ベルリンによる「ファイバーラウンジアームチェア」です。ずっと座っていたくなるような快適さに加え、シェルには100%リサイクルプラスチックを使用するなど、サステナビリティにも配慮した新作展示となりました。

FLEXFORM
「BETWEEN THE FOLDS」

FLEXFORM TOKYOでは、目に留まらないようなディテールにまでタイムレスでエレガントな美を行き渡らせる「FLEXFORM（フレックスフォルム）」の世界観と、40年に渡りブランド監修を務めるイタリアデザイン界の巨匠アントニオ・チッテリオによる新作ソファ「CAMELOT」を中心に、初の日本人デザイナー柴田文江による新作アームチェア「ERI」、復刻となった「GINGER CHAISE LONGUE」などの2024 NEW COLLECTIONもお披露目されました。

*サヴォアフェール：ノウハウ的な技巧美、才覚にも似た体験美、そしてなんとも言えない佇まいをもたらす創造美がブレンドされた匠の技を凌駕した天賦の才のこと。

一部を除き写真は©Nacasa & Partners

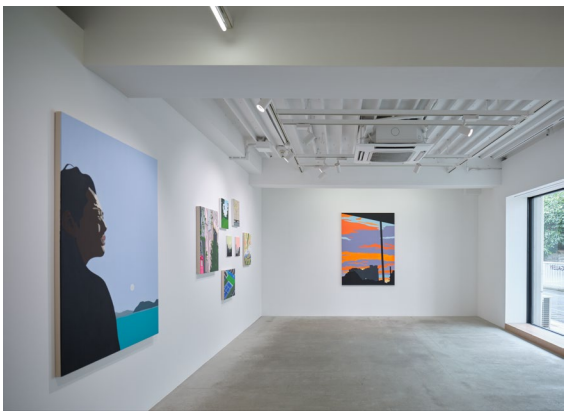
空間を彩るアート作品

Manami Numata × sync Inc.
Sky Pocket

今年青山通りにオフィスを移転したsync株式会社に併設されている「sync public」では、東京藝術大学大学院を経て数々のアワードを受賞する注目のアーティスト沼田愛実の個展が開催されました。地元・萩市を拠点とし、自然の雄弁さを感じながら制作を行うことで、地図や静物をモチーフに人生と旅路を重ねた作品群に「空」をコンセプトとした色彩豊富な新しいシリーズが加わりました。今回はその新シリーズより、空が最も美しく変化する瞬間を捉えた、色鮮やかな作品たちが展示されました。

Manami Numata ×sync Inc.　Sky Pocket ©Yosuke Owashi

MAHO KUBOTA GALLERY　Brian Alfred個展「Golden Hour」

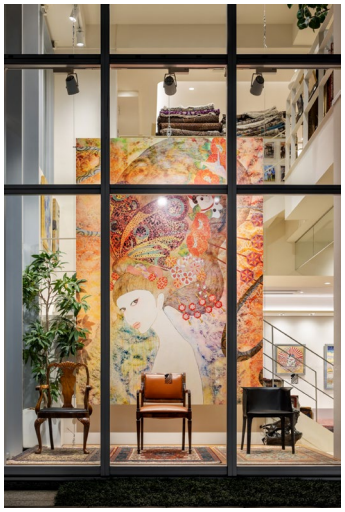


Brian Alfred 「Golden Hour」at Maho Kubota Gallery
©KOHEI YAMAMOTO

原宿と青山が重なる東京の文化のクロスポイント、神宮前に位置するコンテンポラリーアートのギャラリー「MAHO KUBOTA GALLERY」では、ニューヨークを拠点に制作するブライアン・アルフレッドの個展「Golden Hour」が開催されました。本展では、アーティストが訪れた旅先の風景や、日常の中で経験した輝く瞬間の数々が描かれ、煌めく人生の一瞬のスナップショットの様な作品が会場に並びました。忙しい日常の中で出会う心を動かす瞬間の刹那の煌めきを、絵画という形で結晶させた作品群は、鑑賞者に自身の記憶や大切な経験を呼び起こし、人生における美しい時間を感じさせてくれたことでしょう。

現代アート作家 MARINO. × NOI STUDIO
「自然という時を描く」— 原画と未来のAIアートの融合

Courtesy of MARINO. × NOI STUDIO



©Nacasa & Partners

自然界からのインスピレーションを源に、見えない存在とともに「時」を描き出す現代アート作家MARINO.は、建築デザイン分野でデジタルイノベーションを牽引するNOI STUDIO（高木秀太事務所）とのコラボレーションにより、アートがファッションや空間デザインといった異なる領域にまで拡張される表現を模索した作品を、多くの人が行きかう渋谷西武のウィンドーにて展示しました。テクノロジーとアートの融合によって、未来のアートのあり方や可能性を探求し、自然とデジタルの新しい対話を提示しました。

LIONRUGS X KAORUKO　ジャポニズムとペルシャ絨毯との融合

ペルシャ絨毯を専門とするギャラリーショップ「ライオンラグス青山」では、NYを拠点に活動する現代アーティストKAORUKOが今回の為に制作した最新作や、彼女の過去の作品から制作したペルシャ絨毯を初公開。KAORUKOの繊細な色使いまで忠実に表現された作品群は店舗をさらに華やかに飾り、フェミニンなジャポニズムの世界と中東の國ペルシャの伝統工芸品ペルシャ絨毯とが融合された空間に、多くの人が訪れました。

デザインプロセスの裏側に迫る展覧会

Takramのプロダクトデザインとその裏側

さまざまな分野のチェンジメーカーとプロジェクトを共にしてきたデザイン・イノベーション・ファームTakram（タクラム）は、現在まで手掛けてきた数あるプロジェクトの中からプロダクトのデザインに焦点を当て、実際の製品とともにそのデザインの裏側を公開する展示を開催しました。クライアントと共に新たな価値を創出するためのデザインプロセスとはどのようなものだったのか。プロジェクト当時の資料やプロトタイプ、高いクオリティを実現する手法などを、展示を通じて解き明かしました。普段公開されることの無いデザインプロセスの裏側を見れる貴重な機会とあって、会期中は多くの方が会場に訪れました。

すべて©KOHEI YAMAMOTO

ザ・コンランショップ 30周年企画
INSPIRATIONS for the NEXT

ザ・コンランショップ 丸の内店では、日本上陸３０周年を迎え4名のデザイナー（熊谷彰博・工藤桃子・藤城成貴・柳澤星良）とともに、アジアや日本に根付く文化や素材、さらに、日本ならではのクラフトや作り手と協業し、現代的な家具作りを目指す新たなプロジェクト「INSPIRATIONS for the NEXT」を紹介しました。中央のテーブルには、デザイナーとザ・コンランショップがリサーチした民具、工芸品、道具など「置く」「固める」「積む」「運ぶ」「包む」「曲げる」「吊る」の7つの機能や構造を中心に、商品開発の礎として『INSPIRATIONS』を展示しました。

インターナショナルな交流と活気が高まった１０日間

DESIGNART TOKYO 2024開催初日のレセプションパーティや、初の試みのTokyo Midtown DESIGN TOUCHとの共催によるクリエイティブを語り合う場、CREATIVE PUB「GRADATION」では、様々な分野で活躍するコネクターをはじめ多くの方々が参加され、大変な盛り上がりを見せました。また10/22には、DESIGNART TOKYO に出展しているアーティスト等も登壇した、発起人のひとりアストリッド・クライン／マーク・ダイサム（Klein Dytham architecture）主催によるPechaKucha Nightも開催されました。その他にも、数多くの出展者がパーティやトークイベントなどを開催し、会期前から会期後まで国内外の多種多様な方々が参加され、インターナショナルな交流と街の活気の高まりを感じることが出来ました。

写真左・上ともに： CREATIVE PUB「GRADATION」の様子

写真右上から： オフィシャルシャンパーニュ『ペリエ ジュエ』、DESIGNART TOKYO 2024 レセプションパーティ、©RYO USAMI　写真下：PechaKucha Night x DESIGNART TOKYO Special 2024　© Brian Scott Peterson

RECORD／実績（2024.11.13現在）

・来場者数	のべ約227,000人
・オンラインビュー数（Web・SNS含む）	約161万ビュー（8/3-11/10 ）
・メディア掲載数	601（新聞 / 雑誌 / WEB / ラジオ / SNS）
・出展者数	117展示
・参加クリエイター＆ブランド数	約260名（アーティスト、デザイナー、建築家、ブランドなど）
・会場数	96会場
・マッチング数	45組

DESIGNART TOKYO 2024　開催概要

テーマ：「Reframing ～転換のはじまり～」
会期：2024年10月18日（金）～10月27日（日）の10日間
エリア：表参道・外苑前・原宿・渋谷・六本木・広尾・銀座・東京駅周辺
主催：DESIGNART TOKYO 実行委員会
発起人：青木昭夫（MIRU DESIGN）／川上シュン（artless）／小池博史（NON-GRID）／永田宙郷（TIMELESS）／アストリッド・クライン（Klein Dytham architecture）／マーク・ダイサム（Klein Dytham architecture）
オフィシャルウェブサイト：https://designart.jp/designarttokyo2024/

SUPPORTER　J-WAVE 81.3FM

HOTEL PARTNERS　THE TOKYO GINZA EDITION　DDD HOTEL

SPONSORS　CHAMPAGNE PERRIER-JOUËT　LIXIL　VOLVO　Molteni&C　SONY　PAOLA LENTI　WORLD

VENUE SPONSORS　TOKYO MIDTOWN　AXIS　HIBIYA OKUROJI　株式会社 ジェイアール東日本都市開発　SEIBU 西武 渋谷 www.seibu.jp　ARAKAWA　3rd inc.

DESIGNART TOKYO 実行委員会
107– 0062 東京都港区南青山 2 –15 –19 フジハイツ402
info@designart.jp　http://designart.jp

イベントに関するお問合せ　2024exhibitors@designart.jp

取材・掲載のお問い合わせ　担当 小高妃登美　press@designart.jp

instagram.com/DESIGNART_TOKYO
twitter.com/DESIGNART_TOKYO
facebook.com/designart.jp